

荒巻義雄

黄金の珊瑚礁

書下し長篇スリパー伝奇3

さん

ご

しょう



TOKUMA NOVEL



TOKUMA NOVELS

発行者 徳間康快

発行所 徳間書店

東京都港区新橋四ノ一〇 郵便番号一〇五

電話四三三・六二三一 振替東京四一四四三九二

荒巻義雄

黄金の珊瑚礁

Yoshio Aramaki © 1978

カバー装幀 浜田泰介+矢島高光

本文挿絵 中原 脩

落丁・乱丁はおとりかえいたします

書下し長篇スーパー伝奇③

さんごししょう

黄金の珊瑚礁

丸卷義雄



黄金の珊瑚礁

目次

これまでのあらすじ 9

〔プロローグ〕

波 206 号潜水艦 13

〔第I部 大南海の秘宝〕

バンザイクリップ

万才岬 24

大正の新聞 51

寝物語りの過去 72

私設博物館

90

血文字の警告

114

〔第Ⅱ部 黄金塔の島〕

デレウル同盟

138

呪いの遺跡、ナン・マタール

164

魚雷攻撃

187

秘島への道

208

火口底の謎

230

〔エピソード〕

Mの秘密

247

●あとかぎに代えて●

蛸の八ちゃんかく語りき

266

『キンメリヤ秘宝』シリーズこれまでのあらすじ

第一巻 『黄金藪の睡り』

榊恭介はトラベル・ライターである。年齢は三十少し前で未だ独身。最近は友人桃山明秀の推
めで、古代史を紀行文の中にとり入れて結構繁昌している。死んだ父親が遺してくれた新宿稲荷町
の土地に「榊コーポ」を建て、その塔屋が生活の本拠だ。五階には七つ歳上の未亡人犬山栄子とそ
の息子洋一が入居していて、恭介はときどき身の回りの世話などしてもらっている。明秀は恭介と
同世代で、同じ町内にある諏訪稲荷の神主だ。卒業間際の東大を中退し、就職も棒にふってインド
でヒッピー暮らしをしていたという変り種である。帰国後両親と死別。他にも感ずるところがあつた
らしく、この小さな社の神主におさまった。かたわら角筈の街頭に「靈感占い」の行燈を出し、若
い女性客を相手に易者としてもなかなかの手腕を発揮している。

さて、厳冬の北海道取材を終えて帰京した恭介に、正月早々一通の手紙が届いた。差出人は宮下
雪江、取材先で奇妙な出会い方をした女性で、恭介より三つ四つ歳上らしい。その取材旅行には他
にも奇妙な出来事が多かった。撮影済みのフィルムを脅しとられたり、凍った雪道に尾髄骨をうち
つけたたり、聞える筈のない声を聞いたり……。それに明秀に指示されて会った函館の島海由岐子と
は、会った途端、簡単に結ばれてしまった。青森の新聞社主の娘で水産大学三年生の由岐子は、恭
介を「お告げの人」と呼んで当然のように身体をぶつけてきたのだ。

ともあれ恭介は、やがて弘前ひろまきから上京した雪江に協力して、失踪したその夫相原圭吾あいはらけいごの行方をたどることとなった。相原は東京にも愛人を置き、二重生活をしていたらしい。雪江の積極的な誘いで結ばれた二人は、相原の郷里諏訪にまで足を伸ばしたが、収穫のないままに雪江は帰郷した。

そんな恭介に明秀は、この失踪は天孫教事件に関係ありと告げ、神田須田町に社屋を構える「夕刊イヴェント」社の山城鬼太郎やましろきたろうにひきあわせた。「夕刊イヴェント」は都内で発生した犯罪事件を速報する異色の新聞で、社主の鬼太郎はW大新聞学科卒。歴大な新聞のコレクターとして有名だが、それらの新聞の記事をほとんど記憶しているというコンピュータ的記憶力の持主でもある。圭吾の父周三しゅうぞうが興した天孫教とは、日本の天孫族とは遠い昔ユーラシヤ大陸を越えて渡来したアマゾン族であるとする異端の説で、ために昭和十年、大弾圧にあつて壊滅したという。やがて相原圭吾に關係する人間が次々と殺害され、肝心の雪江も行方不明になるに及び、事件は謎を深めて行つた。

そんな折り、明秀は恭介を新宿西大久保のトルコ「鬼巖城」きがんじょうに誘い、更に驚くべき事実を告げた。なんと、明秀、鬼太郎、犬山栄子、鳥海由岐子、それに「鬼巖城」に働くトルコ嬢たちは、アマゾン族の血をひく天野照子あまのてるこを共通の母とするファミリーで、明秀はその長であるという。しかも、彼らはそれぞれに超能力者なのだ。明秀は読心と透視、鬼太郎は超記憶、栄子は遠隔精神感應、由岐子は予知と透視、トルコ嬢河祐子かみゆうこは念力といった具合。その上彼らは、警視庁外局のM老人の意をうけて、ひそかに犯罪捜査に協力しているのだ。そしてその夜行なわれたオムニガミイを経て、恭介はその一員として迎えられた。なぜならスキタイ族の血をひく恭介は、遠い昔アマゾン族に新しい血を注ぎこんだスキタイの若者たち同様、宇宙のエネルギーを一身に集めてそれをファミリーに伝えるべく運命づけられていたからである。その恭介にもやがて、白光色のオーラとともに超能力が発現した。彼のチャクラが開放されたのだ。

そして、不思議なテレパスに導かれて青ヶ島に飛んだ恭介は、再会した由岐子に島の洞窟の砂金風呂に案内された。更に謎の老人柄内敬四郎から恭介は、古代に溯る不思議な話を聞かされた。この太平洋一帯には、太古、黄金種族キンメリヤ人がもたらした七つの秘宝が眠っているという。その内二つは日本にあり、砂金風呂はその一つにすぎないというのだ。ならば、日本にあるというキンメリヤ第二の秘宝“黄金蘭”とは何か、そしてそれは何処に？

恭介は雪江の行方を追ひ春浅い津軽へと――。だが、その再会の何と妖しく哀しかったことか。黄金蘭族の血をひく雪江は、自らの妹で“黄金蘭”をつむぎ終え、恭介を待ちうけていた。そして、忘れ得ぬ一夜の交情を残して永遠にその姿を消した。なぜなら、恭介の子を宿した雪江はやがてその子を産み落す、その時、彼女はこの世のものならぬ存在と化すからだ。

ともあれ、キンメリヤの秘宝は、七つのうち二つまでがファミリーの手に帰した。そして恭介には、雪江の憶い出にひたりつつ神話的時間の流れに身をゆだねる日々が続いている……。

第二巻 『黄金の不死鳥』

夏――。恭介も一時の虚脱状態を脱し、“夕刊イヴェント”社の新社屋工事の責任者として多忙な日々を送っている。完成の暁にはコンピュータが導入され、明秀ファミリーの作戦指令室が設けられるのだ。

そんな折、東京と横浜で変死事件が発生し、明秀はM老人の指示で調査にのり出した。変死したのはキャバレー経営者桜田重治と画家奈良竜太郎だ。彼らは改憲党巨智派の領袖巨智大陸を中心とする奇妙なグループの一員で、他にフェニックス自動車会長長岡勝利、不動産業者三林猛、女画廊主山村鎮子がメンバーになっている。

調査のため奈良の娘絵理子エリ子を訪問した明秀は、超直観的認識力ともいべき超能力を持つ彼女とすっきり意気投合、たちまち深い仲になってしまった。そして彼女から、事件の背後に超古代の秘宝が存在することを教えられた。その秘宝「黄金の不死鳥」は、今より三千年以上前、ネブカドネザル大王治下のバビロニア王国で製造され、古代オリエント王朝の間を転々、やがては中国の秦帝国の創始者始皇帝の手に渡ったものだという。キンメリヤ第三の秘宝は、こうしてそのおぼろな姿を現わしたのだ。だが、フェニックス美術館に収蔵されているその不死鳥は、何か特殊な材質と構造を持つらしく、明秀の透視力をもってしてもその正体が不明なのであった。

一方恭介は、桜田の女であった張真織ちようまおりの調査を命ぜられたが、中国国籍を持ち女子大で東洋史を専攻する真織は、どこか宮下雪江に似た妖しい雰囲気を持ち、恭介をたちまち魅了してしまった。

だが、殺伐な事件が産んだ二つの恋をよそに、事態は陰惨な経過をたどり始めた。巨智グループのメンバーが次々と変死を遂げていったのだ。そして、カバラの秘儀に則ったその殺害方法と地名に秘められた謎こそ、遠く戦前にまで溯るこの事件の全貌を告げるものであった。それは、ユダヤ系中国人の秘密結社秦氏同盟はたしと、巨智大陸率る虹機関との、復讐と野望が織りなす血の抗争なのである。ついに巨智グループを抹殺し、「黄金の不死鳥」を武器に世界制覇の第一歩を踏み出した秦氏同盟……。だが、その陰謀はファミリーの必死の反撃に、成就寸前もろくもついでた。異形の結社員真織と絵理子も、愛する明秀、恭介の前からその姿を永遠に消したのである。

キンメリヤ第三の秘宝「黄金の不死鳥」——それは特殊な白砂を黄金に変える錬金術機械なのであった。そして恭介は今、「鬼巖城」に収められた不死鳥の奏でる楽の音に耳をすませつつ、またしても蒼古の時間にひたり続けている。

だが、残された四つの秘宝を求めて、明秀ファミリーの冒険は更に続くのだ……。

プロ
ロー
グ

波
206
号潜水艦

——黎明の海を、波206潜はふたたび海中深く潜航しはじめた。

前方、遠い島影は与論島である。

敵機動部隊の沖繩本島をとりかこみ、遊弋する艦影が朝霧の中にかすんでいた。

武石少佐は、おそらくふたび視ることはできぬであらう海原の東雲を、一瞬網膜に焼付けると、荒浪の洗いはじめた艦橋より身を艦内に翻して、ハッチを閉めた。

「急速潜航!! 深さ一〇〇」

「急速潜航宜候……」

九州基地より無断出撃してからはや数日、波206潜は終始敵のレーダー索敵に悩まされていた。この波206潜は、帝国海軍が本土防衛の決意を秘めて開発建造した世界に誇る新鋭小型潜水艦である。

基準排水量三二〇トン。艦尾につけられた航空機様の安定翼が特徴である。

装備は、艦首側に魚雷発射管二基、七・七ミリ機銃一門。魚雷搭載数、五四センチ酸素魚雷四本。この優秀な急速潜航性能、水中操縦性能を持つ波二〇一型は潜高小と暗号されて、専ら本土周辺の航空機活動圏の外縁に出撃して敵艦隊を迎撃せんがため造られた沿岸防衛専用潜水艦である。

従って航続距離は比較的短い。

水上巡航一〇ノットで三〇〇ノット、(五五五六キロ)、

潜航時二ノットで一〇〇哩(一八五キロ)である……。

「進路変更〇・三、速力一三、聴音員は油断するなッ

……」

武石少佐は矢次ぎ早に指令を発するや、口調を嚴肅なものに改めた。「沖繩は間近である。攻撃は明朝、特攻機の襲撃に呼応して行う。なお、全員は各自好きな物を食べてよし、交替で睡眠をとれ……いまのうちに英気を養っておくのだ!!」

全員が死ぬ覚悟だった。部下達のすべてが彼の画に従う同志であった。この単独沖繩特攻戦は、武石少佐の独断で決行されようとしているものである。従って後日の太平洋戦史には全く記録されてはいない。

いや、戦後の全ての戦争記録には、この波206号の艦籍すら抹消されているのである……。

だが、いったい彼の設計とは、どんなものであるのか？

いまや武石少佐とその部下たちは、生きてふたたび祖国の土を踏まぬ覚悟で、万に一つの確率に賭けた男たちのロマンの旅に踏み出そうとしているのだ!!

——武石少佐は一刻の仮眠をとるために艦長室に入った。まどろむ寸前に彼の思考は、さまざま彼の過去の思い出を脳裏に表出させた。彼の戦歴は長い。本土に転属されるまではソロモン海域の戦闘に従事していた。

だが潜水艦乗りとしての彼の武勲にはさしたるものがなかった。これは太平洋戦における潜水艦隊全般について言えることで、彼らは、その本来の任務を与えられる機会が少なかったためである。

たとえば彼らは、ガダルカナル作戦のように、時には魚雷を外し、物資輸送に専従させられたりしたのだ。

武石少佐は、これが口惜しかった。この武人としての憤懣こそ、今度の沖繩潜水艦特攻を決意させたひと

つの大きな動機であった。現に彼の乗っていた艦は、ついに一発の魚雷も発射する機会に恵まれず、敵の空襲を受けてラバウル沖の海底に沈んだのだ。艦を失った彼は、共に生き残った歴戦の部下たちとともに祖国に帰った。昭和十八年暮のことである。

しかしである、その途次立ち寄ったサイパン島で、もしもあの男との邂逅が無かったとしたら、今度の軍法会議必至の独断出撃は決行されなかつたらう。

その男の名は蝶舞勝晴、戦前から島の医者をしてい

る人物だ。
(だが、彼の言ったその南海の孤島に今も眠るとい

大秘宝の話は、果して本当なのだろうか……)
むろん平時であれば、いかにロマンを愛するこの武石光成とはいえ、おそらく一顧だにしなかつたらう。だが、その到底信じがたき話を、彼はあえて信じようとしたのであった。

もはや刻々、戦況は緊迫していた。おそらく日本は必敗するであらう。それは、はや如何ともし難い命運であった。

だが、それ故にこそ武石少佐は、男としての死場所